

論文の内容の要旨

論文題目

中国黄海島嶼漁民の人類学
—歴史・相互行為・外部環境—

Society & History of the Chinese Yellow Sea Islands
—An anthropological approach to the islands—

氏名 緒方 宏海

本研究は、中国黄海に浮かぶ長山諸島の事例から、文化人類学の手法をもって、「周縁」とされてきた島嶼に生きる人々が、日常の生活世界でどのような相互行為の特徴を有し、「島嶼」と呼ばれる特徴の社会を形成し、また外部環境である国や陸地本土との関係のなかで、歴史を構築してきたのかを明らかにしようとするものである。本論の議論の材料は、現地調査において収集した民族誌的資料、現地政府や村落の統計資料及び歴史文献資料である。

筆者が、中国黄海に浮かぶ長山諸島へフィールドワークに初めて出かけたのは2004年8月のことである。その時に乗船したフェリーの船長は、筆者に、海域使用权をめぐる島民と外部企業の対立から発展した暴動の事件があったことを例に挙げて、島民にはハッキリ見えるかたちで、「島上人心齊」（島の人々は、心は一つである）ことを語ってくれた。

本論の論証で捉えようとする疑問は、この時の体験と長年のフィールドワークに根差している。つまり地理学が指摘するところの離島という隔絶性から生じる、中国黄海島嶼社会において観察できる社会的場所における人々の相互行為の特徴はどのようなものであろうか。そうした相互行為が彼らの黄海島嶼社会の在り方、社会秩序と共同体として経験してきた歴史とどのように結びついているかである。ここで言う相互行為とは、個々人の気儘で恣意的な相互行為ではなく、彼らの共同体内において、外部観察者が明確に観察できる島民ら

が考えるふさわしい振る舞いであり、そこには慣習性と拘束性を伴い、共同体として求められる行動規範のことである。

本論では社会科学において現在提示されている島嶼社会論や島嶼性に関する議論に対して、その分析方法の対案として、島嶼性の特性である隔絶性、環海性について注目しつつも、島嶼性を、島民の文化アイデンティティ、集団主義的行動の説明として用いず、島民の日々の相互行為に焦点を当てて考察した。また島嶼性は、島嶼の社会現象についてすべてを包括したという用語であり、漠然としている。つまり、島嶼性は、島民等が構築する社会関係の総体、行動規範について曖昧にしてしまった結果、その「総体」を構成しているはずの、島民と島民の間の個別的な関わり、相互行為を退けるような用語となっている。

例えば、フランスの社会学者のマイスターサイム(Meistersheim, Anne)は、次のように分類している。「アンシュラリテ (島嶼性)」(地理的、経済的、物理的、生物学的、社会的な特徴)、「アンシュラリズム (島嶼主義)」(社会政治的、地政学的、孤立主義、偏狭さ)、「イレイテ (島嶼性)」(島嶼に生きる人々の心理または島国根性)、この三つを通して、島嶼的状况に結びついた現象を捉えることが、有用な分析方法であると指摘している。だが、グローバル化した今日において、人々の生活が脱定着化し、島という地域社会内部で、集団として共有していた意味が不均質になることもあり得る。その意味で、本論は島民の相互行為に焦点を当てた。またフランスの人類学者ジャン・ピエール・カストラン (Castelain, Jean-Pierre) は、論文の中で、マイスターサイムの指摘を引用しているが、人類学が如何にして、島にアプローチすべきかについて提示していない。

そして現代中国研究においても、離島・島嶼に関する民族誌的研究は極めて限られている。本研究はかような研究上の空白を補填する民族誌である。

本論は全体に三部構成からなる。まず序論では、社会科学における島嶼に生きる島民の島国根性といった心象性や文化アイデンティティ、島固有の島嶼性に関する研究には、島嶼コミュニティをいかに捉えてきたかを概観し、その研究の動向と問題点を整理したうえで、本研究の学説上の立脚点を示した。

次に中国人の相互行為の特徴について、費孝通の「差序格局」、梁漱溟の「倫理関係」を検討し、その盲点として女性の相互行為の特徴を蔑ろにしてきたことを指摘した。本論が扱うのは島嶼漁村であるが、農村で議論されてきた「差序格局」を出発点にして、村落社会に生きる中国人の相互行為の特徴には、世代、性別、職業によって、相互行為の特徴異なる傾向が見られることを提示した。

本論は、まず第 I 部第 1 章では、歴史資料から、長山諸島は島嶼である故に、無政府状況下で、島嶼内で成立した「実供」制度や集団治安組織である「会」の組織があったことを明らかにした。かような「実供」制度や集団治安組織である「会」の組織は、明らかに島嶼性に由来する地域社会の特徴であった。

第 2 章では、日本が長山諸島を支配して以降、全体として行った関東州の漁業政策について明らかにした。植民地政府は「魚覇」と「貧苦漁」の階層性の二分を貫き、差異の恒常

化を図ることで、日本本土への安定した魚類の供給を行っていた。続く第3章では、中華人民共和国建国後、長山諸島の島民等がいかにして編入されていったのかを明らかにした。中国共産党政府は、「魚覇」を打倒し、貧困層の負債を帳消しにした。島嶼性に起因する「実供」制度を解体させたことによって、島民を新しい国への編入と、島民の関係に平等性を確立した。長山諸島は、清朝の崩壊、帝政ロシアと日本による関東州の支配、中華人民共和国成立など何度も政治体制の変化を経験してきた。そこには、常に島嶼性の特性である隔絶性、環海性と向い合いながら、島嶼社会を形成してきた歴史がある。かような社会変動の経験は、今日の島民を団結させるある種の相互行為の秩序を形づくってきた。

第II部では、改革開放期以降から今日までの暮らしの実態について、島民の主要な生業である漁業の現場に見られる島民の相互行為に焦点を当てながら、その相互行為の特徴を明らかにした。第4章で明らかになったのは、長山諸島の場合、世代、性別、職業によって、相互行為の特徴には異なる傾向が見られたことである。

中国人の相互行為の特徴を指摘した費孝通は、自己と最も親しい親族を第一に、親族の次に親疎関係の序列化を指摘していたが、本論で明らかになったのは、島民の親族関係には、血縁関係第一であるとは限らずに、利害対立を回避しながら、その親族関係を選択している。かような相互行為の特徴を帯びようになったのは、急速な経済発展を遂げた島の社会状況と島民の家族意識の変化と大きく関係している。人々の間に親族関係、社会関係を選択する柔軟性が個人レベルまで意識されるようになったのである。島民の近隣関係を見ると、島民の女性と漁師では異なる相互行為の特徴が見られる。

島民の女性たちは、夕方のダンスを端緒にしてその近隣のつながりを深めていく。そこには、近隣関係の遠近と利益が必ずしも比例していない互惠関係が認められる。これに対して、漁師の男性の付き合いは異なる。多くの男性漁師は、請負した限られた漁場で、利益を最大化するために漁獲量を増やそうとする。漁師たちの近隣関係は、自己を中心に、本音と建前で、近隣関係が結ばれている。島の女性は、男性漁師たちの近隣関係の構造的隙間を埋める仲介的な役割を果たしているのである。

第5章では、村民委員会選挙と島の政治的現場に現われるその相互行為秩序を明らかにした。長山諸島の場合、政治参加において、陸地農村と明らかに異なるのは、海上に出ている男性に代わって村民代表会議に参加している女性と、島の様々な問題に対応している婦女主任と「婦代会」メンバーによって担われていることに特徴がある。婦女主任と「婦代会」メンバーは、村民委員会が島民との社会関係を繋ぎとめる切り札であった。これ故に、島の政治空間の一つの特徴として、海上にいる男性に代わり女性が村民会議代表として、自身が感じる劣等感から村落政治に対する沈黙の合意を支持していく一方で、女性たちによって、島民をめぐる諸問題が解決されるという二つの矛盾する方向性があった。また長山諸島の島民は、出稼ぎ労働者との相互行為には、いくらか排他的な側面をもつことを明らかにした。人類学者のジャネット・カルステン (Carsten, Janet) は、マレーシアのランカウイ島の調査で、「もしあなたは長くランカウイ島に住み滞在しているならば、あなたはランカウイ島

の人になれる」という島民の語りを指摘している。だが長山諸島の場合、男性漁師は出稼ぎ労働者が何十年島に住んでいようと、彼らを島民として扱うことは容易いものではない。その背景には島民は「喜歓究根児、喜歓根児在島里」（ルーツについて尋ねることが好きで、島内にルーツがあることを好む）という志向があった。

終論では、以上の本論の議論の要約をまとめ、再提示した。つまり長山諸島では何らかの切実な問題（社会的な困窮や差別）に直面したり、島の外部環境による何らかの影響を受けたり、島民が激しく動揺した時に、島民等の集団行動が前面に出てくるのである。だが日常では、その相互行為の特徴は、同じ島嶼内においても、性別や世代など個人がそのつど直面する問題や関心によって変化したり、再編成されたりするのである。従って、島嶼性または「差序格局」を以て、その本質的性格を捉えにくいのである。これ故に、本論が手がかりとしたのは、ミクロレベルの生活の場で行われる相互行為であり、際立ってくる場面であった。それでも、複数の島民の間に持続的な相互行為とその蓄積があったことによって、島民が一体としてつなぐときに、重層的な社会結合関係があり、そこには伸縮する共同性への帰属意識がある。これこそが、フェリーの船長が筆者に語っていた長山諸島の島民にはハッキリ見えるかたちで、「島上人心齊」（島の人々は、心は一つである）という島民の相互行為の特徴である。